



写真：SportsPressJP / アフロ

写真：SportsPressJP / アフロ

市民栄誉賞特別賞

マラソン視覚障害

道下 美里 選手

すべてを追い風に

東京2020パラリンピック女子マラソン視覚障害T12で金メダルに輝いた道下選手の偉業をたたえ、市は新設した下関市市民栄誉賞特別賞を授与。

2016年には、下関市市民栄誉賞を授与。

道

下選手が走り始めたのは、県立盲学校（現在の下関南総合支援学校）に在籍していたとき。ダイエットがきっかけでした。

2008年、第1回下関海響マラソンで、初めてフルマラソンを走った道下選手。走ることの楽しさを感じました。

わずか8年後には、リオデジャネイロパラリンピックで、**銀メダルを獲得**。「この時、大会で100%のパフォーマンスを出すことの難しさをすごく感じたんですよね。プレッシャーを取り除くために応援してくれる家族のような、『結果なんてどうでもいいよ。頑張ってきて』と言ってくれる人たちがたくさんいれば、100%のパフォーマンスを出せるだろう、**すべてを追い風にしようと考えました**。それからいろいろな人を巻き込んで、いろいろなことに取り組んできました。この5年間走ることを**すべてに優先させ、仲間と一緒に取り組んできた結果の金メダルなので、幸せで、感無**

量です」と道下選手は金メダルへの想いを語ります。

「大会が開催されるか不安な時に、いろいろなところで横断幕を掲げてくださっていることを知るたびに『私は目標に向かって突き進むだけだ』と思うことができました」

道下選手への応援の輪はどんどん大きくなり、道下選手の力になっていきます。

「大会中もみんなが見えない力を送り続けてくれた、支えてくれたことに感謝します」と道下選手。

「走ることは、出会いを運んでくれるツールです。走ることで自分の可能性がどんどん広がってきました。80歳まで走り続けたいと思っています。現役じゃないですよ」と笑顔があふれます。「東京マラソンの女子エリートランナー枠では、ブラインドの選手が走ったことがないので、条件の2時間52分を切り、出場したいです。世界6大マラソン大会にも出たいです」と今後の目標を話してくれました。

市民栄誉賞

柔道

原沢 久喜 選手

すべては東京五輪のために

原 沢選手は、6歳から柔道を始めました。

「中学・高校ではあまり実力がなく、柔道は高校くらいで辞めようかと思っていました」という原沢選手。早稲高校に入学したときの身長は177センチ。66キの軽量級の選手でしたが、卒業するときの身長は約190センチで、体重も50キ近く増えました。

原沢選手は、高校3年生の頃から良い成績が出せるようになり、自分の可能性をもっと試すため、柔道部のある日本大学へ進み、全国大会で優勝するようになりました。

その後、国際大会7連勝、国内外の公式戦連勝記録37という記録を作ります。リオデジャネイロオリンピックでは

代表に選ばれ、男子100キ超級で銀メダルを獲得します。

この大会後、オーバートレーニング症候群やけが見舞われました。しかし、原沢選手は自分の柔道に対する気持ちや自分が今後どういふふう柔道に向き合いたいと考え、**金メダルを目指して再起**します。

最重量級での金メダル獲得に向け、強い気持ちで2回目に五輪に挑み、**100キ超級で5位、混合団体で銀メダルを獲得**しました。

原沢選手にとって、下関はどんな存在でしょうか。「高校まで下関にずっと住んでいたもので、帰ってくると安心します。**下関は自分にとっての原点**です。帰ってくると、たくさんの方に声をかけてもらい



写真：千葉格/アフロ

ます。いろいろな人を見てくださっていたと感じましたし、会場に声援が届くくらい応援を強く感じました。元気をもらったとか、勇気をもらったとか言われるとすごくうれいんです。これから、下関の子どもたちに、柔道とふれあ

機会を提供できれば良いなと思っています」
今後については「今、考えているところですが、**柔道に関わり、市民の皆さんに元気を届けられる存在になれるように頑張ります**」と、一つ一つ丁寧に話してくれました。



東京2020オリンピック柔道混合団体で銀メダルに輝いた原沢選手の偉業をたたえ、市は、下関市市民栄誉賞を授与。
2016年に続き2度目の授与。